



ジョルジョ・デ・キリコ 変遷と回帰

パナソニック汐留ミュージアム

2014年10月25日～12月26日

(11/24 記)

Giorgio de Chirico (1888.7.10～1978.11.20)



1915年、フェッラーラの軍隊に配属され、ユダヤ人街で散策中に見たものの刺激から、「形而上学的室内」の一連の作品を制作。それらはシュルレアリズムの手法：デペイズマン（日常物を非現実的な空間に再構築し驚きを与える）に忠実に描かれた。

素描を重んじ、1920年代は「剣闘士」をテーマに採り上げ、その後、主にギリシャの神々、馬などをモチーフとして描く。1940年代には彫刻を発表し、

絵画には幾何学的マネキンが登場する。『不安を与えるミューズたち』のマネキンの背景にはフェッラーラのエステ家の城が見られる。

上記チケットの画は『謎めいた憂鬱』で、死者を冥府に導くヘルメスは、ポール・ギョーム(画商)に引き合わせてくれたアポリネールへの追悼を表すといわれる。晩年の作品では、アポリネール詩集「カリグラム」ジャン・コクトー詩集「神話」の挿絵に用いたバロック様式の舞台装飾と現代的古典様式が共存する。ギリシャ生まれのイタリア人である彼の回帰は、オリンポスの山とローマの広場であった。